

日本中東学会ニューズレター

JAMES

NEWSLETTER

No. 124

2011/5/13

目次

薫風の古都へ 第 27 回年次大会の準備、順調に進む.....	2
2011/2012 年度評議員・役員選挙の結果.....	3
第 13 期会長談話.....	3
理事会報告.....	5
『日本中東学会年報AJAMES』編集委員会報告.....	7
会員会費特例制度の開始.....	8
東日本大震災後.....	9
佐藤次高さんを偲んで.....	16
会員異動.....	18
寄贈図書.....	19
学会事務局の交替について.....	20
事務局より.....	21
編集後記.....	21

薫風の古都へ 第 27 回年次大会の準備、順調に進む

5月21日(土)、22日(日)両日に開催予定の第27回年次大会の準備は、実行委員会によって順調に準備が進んでおります。先日、全会員に向けてプログラムを送りましたでしたが、すでにご覧になっていますでしょうか。

本年度の初日の公開イベントは、朗読劇とシンポジウムの二本立てとなっております。朗読劇は、岡真理会員の脚本・演出による「The Message from Gaza～ガザ、希望のメッセージ～」を上演いたします。これは、ガザから外の世界に向けて送られた手紙という形で書かれた3つのテキスト(ガッサーン・カナファーニー原作の短編「ガザからの手紙」(1956)、レイチェル・コリーのメール(2003)、サイード・アブデルワヘド教授の「ガザ通信」(2009))等をコラージュしたものです。この朗読劇は、すでに多くの場で公演を重ね大変好評を博しております。どうぞご期待ください。その後に行われるシンポジウムは、「抵抗の文学～世界文学の中のパレスチナ～」と題し、世界各地域の文学・思想研究を牽引するパネリストを迎え、朗読劇の内容を踏まえた上での「抵抗」をキーワードとしたパレスチナの文学的・思想的立場づけについて討論を行います。こちらもご期待ください。

大会参加費および懇親会費の事前振り込みは去る4月15日に締め切りましたが、事前申込み間に合わなかった方も、当日の受付で(大会、懇親会共に)参加の手続きをすることができます。初夏の過ごしやすい京都で開催される本年度の大会により多くの方々をご参加されますようお願い申し上げます。

当日参加費：1,000円、当日懇親会費：5,000円(学生会員は4,000円)

*2日目弁当の申し込み、託児所利用の申し込みは締め切りました。

日本中東学会第27回年次大会実行委員会事務局

〒606-8501 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 東長靖研究室

Tel : 075-753-7383 Fax : 075-753-9641 (共用)

E-mail : james2011@asafas.kyoto-u.ac.jp

(可能な限りメールでご連絡・お問い合わせいただければ幸いです。)

(小杉泰)

2011/2012 年度評議員・役員選挙の結果

2011/2012 年度(第 14 期) 評議員・役員選挙の結果をお知らせいたします。

評議員選挙については、2011 年 1 月 14 日開票の結果、有権者数 424 名のうち、投票者数 131 名（うち有効票 129、無効票 1、白票 1）、投票率は 30.9%でした。学会細則Ⅷ-2 により、評議員数は 60 名以内と定められており、得票数 60 位の被選挙権者を加えると 61 名を超えますので、今期の評議員は以下の 59 名で確定いたしました。

青山弘之、赤堀雅幸、秋葉淳、新井政美、飯塚正人、池内恵、板垣雄三、井谷鋼造、岩崎えり奈、臼杵陽、宇野昌樹、江川ひかり、大河原知樹、大稔哲也、岡真理、加藤博、私市正年、北澤義之、栗田禎子、黒木英充、小杉泰、後藤明、小松久男、近藤信彰、酒井啓子、桜井啓子、佐藤健太郎、佐藤次高、澤江史子、清水和裕、清水学、杉田英明、鈴木董、鷹木恵子、高橋和夫、立山良司、店田廣文、東長靖、内藤正典、長沢栄治、永田雄三、八尾師誠、羽田正、林佳世子、福田安志、保坂修司、堀井優、堀川徹、松永泰行、松本弘、三浦徹、三沢伸生、森本一夫、山内昌之、山岸智子、山口昭彦、湯川武、横田貴之、吉村慎太郎
(50 音順、敬称略)

評議員選挙に続き、新評議員による理事選挙が行なわれ、1 月 28 日開票の結果、以下の 13 名が選出されました。なお、理事選挙にあたり、会則第 9 条の規定により、赤堀雅幸、加藤博、栗田禎子の各評議員は被選挙権を保有しないため、予め理事候補より除外されました。投票数 49（うち有効票 45、無効票 4、白票 0）、投票率は 83.1%でした。

飯塚正人、臼杵陽、大稔哲也、黒木英充、小杉泰、小松久男、酒井啓子、桜井啓子、東長靖、長沢栄治、林佳世子、三浦徹、山岸智子
(50 音順、敬称略)

(飯塚正人)

第 13 期会長談話

日本中東学会第 13 期会長の任期を終えるに当たり、会員の皆様にご挨拶申し上げます。任期の二年間を振りかえり、一言で感想を述べるならば、「学会は事務局で始まり、事務局で終わる」であります。学会の運営は、事務局スタッフをはじめ

めとする方々の献身的な努力に支えられてきたことをあらためて日々、実感する二年間でした。わけても事務局長の店田廣文会員と、二年間事務局長補佐を務められた貫井万里会員には、お礼を申し上げる言葉も見つかりません。店田事務局長には長年の誼にすがって事務局長への就任をお願いし、快諾していただきましたが、その結果、健康面で大変なご無理をさせていただきました。この点、まことに申し訳ない気持ちでいっぱいです。このような学会の事務局が担ってきた業務の負担を考えると、これまで事務局長を務められ、またそれを近くで支えられて来られた方々のお名前やお顔を思い返し、それぞれのご苦勞と献身に対し、あらためてここで敬意を表し、お礼を申し上げたいと思います。歴代の名事務局長の中でも、特筆すべきは、現在、イスラーム考古学研究所を主宰されている川床睦夫会員が、六年間も（1995～2000年度）事務局を引き受けてくださったことです。

また理事の皆さんもその職掌ごとに誠実に仕事を果たされた二年間でありました。この間 WOCMES や AFMA の大会もあり、会則改正や、他学会との渉外関係の業務、ニューズレター編集など、お忙しい教育や学務関係のお仕事の合間を縫い、また貴重なご自身の研究時間を削っての活動により、大変なご負担をおかけしました。同様に、AJAMES の編集委員の皆様も（また査読に当たった会員の方々も）貴重なお時間を使って、この定評ある学会誌の発展に貢献してくださったことを深く感謝いたします。また青山弘之編集長には、私自身も以前に同じ仕事に就いた経験があるだけに、そのご苦勞の一端を理解することができます。また、この二年間、二回の年次大会をそれぞれ引き受けていただいた広島市立大学（大会実行委員長、宇野昌樹会員）、中央大学（同、松田俊道会員）の関係者の皆様にも、見えない点も含めて大変な気配りを示し、努力を尽くしていただきました。ここで一言お礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

さて、以上にお話してきたこととの関連で、新任期への移行に当たり、一点、会員の皆様にご理解をいただきたいのは、学会という組織の性格についてです。これまで私は数回の会長の挨拶の中で、学会の社会的な責任について言及してまいりましたが、しかし基本的に学会は、研究に携わり、学問に関心をもつ自由な個人の集まりです。

私たち会員は、学会誌の発行や、年次大会運営による研究発表の機会提供、ニューズレターの発行、会員メールの配信サービスなど、さまざまな便宜供与を学会から受けています。これらは、いつでも当たり前前享受できる水道や電気のようなインフラのように考えられがちですが、いずれも特定の会員の方々に負担をおかけするボランティア的な仕事によって支えられているわけです。当たり前ですが、学会の会費は、学術情報サービス企業に支払う料金ではないわけですし、

実際、学会員の皆さんの中には、ご自分が関心をもつ研究領域の発展を期待し、いわば協賛したいという気持ちを込めて会費を支払われている方も多いと思います。

たとえば、とくに若い研究者たちにとって切磋琢磨の挑戦の場となっている学会誌は、こういう篤志をもつ方々に支えられているのだという点を確認したいと思います。本学会では、創設以来、一年の学会費を前払いの形で払うという決まりになっています。それは現在、幸いにも日本学術振興会の科研費（研究成果公開促進費）による助成を得ているわけですが、仮にそれがいただけない場合に備えての措置と聞いております。

さて、前会長の私市正年会員が述べられたように、事務局の仕事には、負担軽減の見直しが必要であるとあらためて思います。そして、その見直しにあたっては、学会という組織の性格について、皆さんからのご理解をいただきたいと考え、少々くどい説明をいたした次第です。ぜひ、新年度の学会運営と事務局の体制に、これまで同様のご理解とご支援をいただきたいと願います。

私の会長の任期は、一昨年の大会の挨拶で、前理事の大塚和夫会員の訃報について触れることではじまり、昨年は初代会長の梅棹忠夫先生(任期 1985～90 年度)のご逝去があり、また年度が替わったところで、元会長の佐藤次高先生(任期 1997～2000 年度)をお見送りするということで終わりました。これまで皆で安心して渡ってきた幅の広い大きな橋が急に失われたような状況の中で、茫然とされている方も現在、たくさんおられるのではないのでしょうか。多くの皆様が力を合わせることによって、この難局を乗り越え、さらに前に進む一年となることを祈りたいと思います。

最後になりましたが、今回の大震災で犠牲となった方々を追悼するとともに、大きな被害を受けられた方々にここでお見舞いの言葉を申しあげたいと思います。今回のことで海外の友人から温かい励ましの言葉をいただいた方も多かったでしょう。このような結びつきを土台にして、アラブに新しい革命の波がうねる状況の中、私たちに求められる社会的な期待にもしっかりと応えていくことができるよう、力を尽くしていただきたいと思います。二年間、どうもありがとうございました。

(長沢栄治)

理事会報告

【第 13 期・14 期合同理事会報告】

日時：2011年2月28日（月）18:30～19:30

場所：東京大学東洋文化研究所会議室

出席：長澤栄治、青山弘之（13期）、臼杵陽、加藤博（13期）、黒木英充、酒井啓子、東長靖、林佳世子、三浦徹、山岸智子

欠席：赤堀雅幸（13期）、大稔哲也、栗田禎子（13期）、桜井啓子、小杉泰、小松久男、店田廣文（13期）、山口昭彦（13期）

[議題]

1. 第27回年次大会の企画セッションの中国・韓国学会関係者の招聘費用について国際交流基金助成金を申請済みと報告（4月に採択の通知があり）。
2. 2012年度年次大会開催校について
東洋大学を始め、首都圏の大学を候補として検討中。翌年度についても、議論。
3. 編集委員会報告
投稿規定・内規の変更、プール制の導入・査読者の範囲を拡大について議論。
4. 学会HPのサーバー移行について
国立情報学研究所のサービスが平成23年度末で終了予定であることから、移行先を検討。地域研究コンソーシアムのサーバーに移行する案が検討された。

【14期新理事会報告】

日時：2011年2月28日（月）19:30～20:30

場所：東京大学東洋文化研究所会議室

出席：長澤栄治、臼杵陽、黒木英充、酒井啓子、東長靖、林佳世子、三浦徹、山岸智子

欠席：大稔哲也、桜井啓子、小杉泰、小松久男

[議題]

1. 会長と事務局長の選任
投票（1回目で同数票が出たので、2回目で決選投票）により、臼杵会長と決定。事務局長候補を検討したが、結論に至らず。
2. 理事の任務分掌
任務分掌について話し合ったが、全体的な担当に関する結論については、次回以降の理事会に持ち越した。

(店田廣文)

『日本中東学会年報 AJAMES』編集委員会報告

『日本中東学会年報』(AJAMES)編集委員会より、ご報告いたします。

1. 投稿規定改正

3月22日付メールにてお知らせしました通り、2月28日開催の理事会にて『日本中東学会年報』投稿規定の改正が承認されました。主な改正内容は以下の通りです。

- (1) 原稿の種類に関して、論文、研究ノート、書評論文、資料紹介、研究動向、書評、中東研究博士論文要旨、特集の内容を明示いたしました。
- (2) 投稿締切に関して、これまでは6月20日、12月20日でしたが、審査に慎重を期するため、6月1日、12月1日に変更いたしました。
- (3) 投稿方法に関して、郵送による紙媒体提出を省略するなど、若干簡素化しました。
- (4) 審査に関して、主な審査項目を明示いたしました。

改正された『日本中東学会年報』投稿規定は以下の URL よりご覧いただけます。

http://wwwsoc.nii.ac.jp/james//publications/ajames/contribution/guideline/pdf/ajames_tokokitei_2011mar.pdf

ただし、事務局から連絡がございました通り、震災の影響で国立情報学研究所学協会情報発信サービスのサーバーが断続的に中断しておりますので、上記 URL より改訂版の AJAMES 投稿規定がダウンロードできない場合は ajames-editor@tufs.ac.jp にご連絡頂ければ、PDF 版を添付にてお送りします。

2. 27-1号編集中

現在、27-1号の編集作業を鋭意進めております。今年7月の刊行予定です。

3. 投稿原稿締切のお知らせ

次回の投稿締切は6月1日です(昨年より20日前となっております)。論文、研究ノート、書評、中東研究博士論文要旨、特集などの投稿をお待ちしております。

またこれまでたびたび総会などの場をお借りしてお願いして参りましたが、本誌は欧文雑誌として会員のみなさまの研究成果の普及をめざしておりますので、欧文原稿がございましたら是非投稿ください。

4. 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) での閲覧件数

国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) を通じた本誌の 2010 年の閲覧件数をお知らせします。

2010 年

1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
297	182	217	290	523	496	435	181	241	412	462	514

合計
4250

2006 年のサービス開始以来、順調に伸びてきた年間の閲覧件数—2006 年 (112 本)、2007 年 (1986 本)、2008 年 (2742 本)、2009 年 (4704 件) ——ですが、2010 年は前年を初めて下回りました。

5. 本誌に関するお問い合わせ

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下の通りです。

〒183-8534 府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学総合国際学研究院 青山弘之研究室気付

『日本中東学会年報』編集委員会

E-mail: ajames-editor@tufs.ac.jp

(青山弘之)

会員会費特例制度の開始

2012 年度分会費より、会員会費特例制度の適用が始まり、該当する会員からの申請を受け付けております。2011 年 3 月末日までに、4 名の正会員から申請があり、理事会にて検討の結果、4 名全員の申請を承認しました。

詳細は、前号のニューズレター 123 号 (2011 年 2 月 5 日発行) でお知らせしており、適用には、該当者本人からの申請と、理事会による承認が必要となります。特に締め切りは設けておりませんが、事務手続きの混乱を避けるため、2012 年度分会費を納入する前に、申請手続きをお願い申し上げます。

なお、この制度開始と関連して、大学院などを修了後も会員資格が学生会員の

ままとされている方は、是非、本制度を利用して、正会員の資格へと変更して下さいようお願い申し上げます。
(店田廣文)

東日本大震災後

東日本大震災では、多くの方が直接・間接に被害を受けられたことと思います。これまでのところ、震災や津波で当学会の会員が亡くなったという報にはふれておりませんが、亡くなった方々を偲び、被災者を想い、今後のために何をしてゆくべきか中東研究者として考えてゆくのが自分たちの責務であろうと思われまます。さまざまな意見や感慨があるかと思いますが、まずは、理事に届いた海外からのお見舞いメールの一部を紹介することとし、そして日本在住の中東出身者の人々と大震災後の対応に関する記事の寄稿をお願いしました。
(山岸智子)

海外からのお見舞いメール

東日本大震災に対して海外から学会および理事等に対して、多数のお見舞いのメールが寄せられました。AFMA 関係者からのメールをご紹介します。

Yang Guang 氏(中国中東学会会長) より

First, I would like to express sympathy and solicitude for Japanese people of disaster areas. I'm confident however that Japan would be quickly recovered from these unfortunate incidents. (後略) Best wishes.

Choi Chang-Mo 氏(元韓国中東学会会長) より

Hello?

Are You really OK?

I'm so sorry for your suffering and hard time.

I hope to hear how you are.

All Korean and I also are praying for you and your safety.

Don't give up, JAPAN !

Munkhnasan 氏(モンゴル中東学会)より

I am Munkhnasan (mongolian) who has organized hold by MAMES, international conference of AFMA in Mongolia in 2008 year. Please accept

my deepest sympathy to hear about tsunami. I hope that Japan can decide this problem in near future very fast.

さらに会員の皆さまに寄せられたお見舞いの中で日本中東学会に関わり、会員の方々にお伝えした方がいいと思われるものがございましたら、臼杵までご連絡いただければ幸いです。

(臼杵陽)

多言語震災対応サイトのたちあげ

2011年3月11日に発生した東日本大震災では、周知の通り、津波による甚大な被害、交通・流通や行政機能の麻痺、続発する余震、そして福島第一原子力発電所の事故が重なるなど、まさに未曾有の大混乱が東北地方を中心に広がりました。

こうしたなか、震災地域に居住する外国人は日本語でのコミュニケーション能力・情報収集能力の不足や、海外での興味本位とも言える過激な報道などにより不安を募らせ、一部でパニックを起こしたケースもあったと聞きます。実際、各地の入国管理局事務所では、一時帰国と再入国許可の手続きで、日本脱出を図る外国人が長蛇の列をなし、入管業務始まって以来のパニックが生じた模様です。また、海外では放射性物質の危険が大げさに報じられ、親元から帰国を泣きながら懇願され、不安の度を増した在日外国人も多かったようです。

こうしたときに必要とされる外国人を支援する外国語スタッフも、慢性的な人手不足とオーバーワークに悩まされていたといえます。というのも、こうした外国語スタッフの多くを現地に住む留学生が担っており、そうした留学生自身が震災で現地を脱出してしまったためです。

このような状況の下、日頃から在日外国人のための支援として「語学ボランティア」の活動を行ってきた東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター事務局 (<http://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/cemmer/>) は、震災のあった日の翌日から、同大学の教職員やOB・OGに呼びかけて、多言語での翻訳活動をボランティアで始めました。翻訳活動は、最終的にイタリア語、インドネシア語、英語、カンボジア語、韓国語、スペイン語、タイ語、タガログ語、中国語、ドイツ語、フランス語、ベトナム語、ペルシア語、ベンガル語、ポルトガル語、ルーマニア語、ロシア語の計17言語で行われ、100名以上が参加した模様です(筆者自身は、ペルシア語の翻訳に一部参加しました)。

翻訳活動は当初、仙台市からのお知らせを翻訳する作業から開始し、高速バス

をはじめとする交通情報、給水・ごみ・下水道・ガスなどのライフラインに関する情報、市役所での手続に関する告知、火災・病気予防などに関する注意点、子どもの教育に関する情報などを翻訳しました。その後、翻訳活動は仙台市のお知らせだけでなく、入管手続きに関する情報、そして外国人の不安を最も引き起こした放射性物質の危険性に関する情報についても、翻訳活動を行いました。具体的には、(独)放射線医学総合研究所が出している「原子力発電所被害に関する基礎知識」(のちに「放射線被ばくに関する基礎知識」に解題)を5回に分けて翻訳しました(翻訳文はhttp://www.tufs.ac.jp/blog/ts/g/tufs_disaster_information/にアップロードされています)。

「計画停電」の影響で作業が滞ったり、日本語、特に行政文書に見られる独特の曖昧な表現から、訳すのが困難な文章に多々遭遇するなど、頭を悩ませることの多かった今回の翻訳活動は、情報をめぐる当初のパニック状態は脱したとの判断の下、3月末をもって一旦終了しました。振り返ってみると、今回の翻訳作業は、「外国人への情報提供」という形で他の方々にお手伝いをするという以上に、自分自身の啓発のきっかけになったようにも思えます。例えば、「放射性物質」と「放射線」、「放射能」という言葉の意味の違いすら明確に意識していなかった者が、他言語への翻訳を通じて、ある程度理解を深めることができたことは、筆者自身にとって大きな成果でした。

もちろん、翻訳の正確さについては、少々心もとない点があることは率直に認めなければなりません。「被曝」のような語をどのように訳すべきか、悩ましい点が多々ありました。ペルシア語では、筆者は「放射性物質への汚染」と訳しましたが、果たしてこれで良かったのかなど、こうした「疑念」は数え上げればきりがありません。

ただ、筆者が担当したペルシア語でどれほどお役に立てたかは自信はないものの、全体的には、母語での情報がほとんどなかった外国人の方々にとっては、それなりの安心材料を与えることができたようです。実際、英語や中国語、韓国語などの主要言語による情報は一定程度あるものの、ベトナム語やインドネシア語などによる情報は、それらの言語を母語とする外国人居住者が多い割には決定的に不足しており、その意味で少数言語を含めた今回の翻訳支援は意義があったと考えています。また、多忙を極めた行政関係者の方々や、震災地域で外国人と関わり、震災後の彼らのケアに苦勞されているの方々からも感謝のお言葉を頂き、わずかではあるものの、一定の後方支援ができたのではないかと感じています。

今回の異常事態を前にして、外国語教育は社会にどう貢献できるのか(あるいはできないのか)について、そのあり方を含めて、一度考えてみるきっかけにしてもよいかも知れません。

(斎藤正道)

言語デバインドと情報提供インターフェイス

東日本大震災では、地震、津波、福島第一原発の事故が折り重なるように起こり、広域に渡る大きな被害をもたらした。復興に向けては国の総力をあげた取り組みが必要となるだろうが、より小さなレベルで、個人や組織がどのような役割を果たせるか、非常時において必要な連携や協力のあり方についても問われたように思う。ここでは筆者が個人の震災情報ウェブサイト構築を通して考えたことについて、触れさせていただきたい。

きっかけは、震災の翌日にかかってきた一本の電話だった。「元氣かい、調子はどう」という型どおりのいつもの挨拶が終わると、電話の相手はすぐさま本題を切りだしてきた。「それで、いったい今何が起きてるんだ？危険なのか、それとも大丈夫なのか」陽気なアラビア語の声の調子を保ちながらも、動揺している様子が伝わってきた。ああやっぱり、不安なんだ、といまさら気付かされる思いがした。

電話をくれたのは埼玉県に住むパレスチナ人の友人だ。フィールド調査の際はあちらでいろいろ案内していただき、大変お世話になった。今は仕事でこちらに来ていて家族と一緒に住んでいるが、事態の急変と情報不足で心配になったらしい。私自身、状況を把握しきれていない面もあるため、分かる範囲で説明し、またいつでも連絡して、と言って電話を切った。

とりあえず、インターネットにかじりついて調べてみるものの、日本人の私にとっても震災直後に流れる情報は断片的で、所在を見つけるのもひと苦労だった。岩手県大船渡市に住む友人の行方が知れず、心配だったが、携帯会社の伝言サービスも最初は使い勝手がよく分からなかった。安否確認にその後活躍することとなる Google パーソン・ファインダーに行き着いたのも、ずいぶん時間がたってからだった。気象庁や東京電力のサイトには接続が悪く、公式サイトからの情報発信だけでは必要なことが分からないように感じた。

そんな中、意外に頼りになったのが最近流行りの Facebook や Twitter、Picasa といったインターネット・メディアである。Twitter では被災地における簡単な医療相談情報のまとめや、放射能の専門家による原発事故関連情報などがリアルタイムで配信された。岩手、宮城、福島の前避難所に掲示された避難者リストの画像ファイルは Picasa の公開サイトにアップロードされ、それに基づき名前を書き起こすボランティアが全国各地で始まった。それら各自が知り得た情報を交換し、それぞれの知人に拡散する場として Facebook や Twitter が活躍した。中東での政変や抗議運動の高まりを受けて、自分も注目し始めたこうした情報メディアの

存在は、緊急時の日本においても一定の有効性を発揮しているように思う。

とはいえこれらのメディアを活かす際にも、やはり言語の壁は大きいと感じた。配信される情報のほとんどは日本語によるものだ。震災を受けて中東各国の報道機関はウェブサイトで一斉に、日本の現状を伝え始めたので、アラビア語話者などはそれらのページを通じて情報を得ることはできたかもしれない。しかし日本から直接、国内在住の外国人に対して多言語で発信される情報の量はきわめて限られるように感じた。

翻訳の試み自体がなかったわけではない。むしろそれは早くから始まり、Wordpress の「Japan earthquake how to protect yourself」というウェブページでは、震災の直後から各国語への翻訳ボランティアが Twitter や Facebook などを通して募集され、急速に整備が進んでいった。震災翌日の時点ではまだ 10 数言語への訳にとどまり、アラビア語訳もなかったが、本稿執筆の 4 月半ば現在、ページは 41 言語に翻訳されている (<http://nip0.wordpress.com/abou>)。東京外国語大学の多言語・多文化教育研究センターによる翻訳プロジェクトも、放射能被害を含めた新しい情報を随時 17 言語に訳する、他に例を見ない試みであった。

だが問題は、情報が各所に散在し、必ずしもアクセスしやすい形でまとまっていなかったことだ。せっかくの貴重な翻訳も、説明や目次自体が日本語で書かれていると、多言語による情報が提供されていることが分からず、活用されづらいのではないかと感じた。利用者に対して使いやすい形式、インターフェイスで提供することは、実はかなり重要なのではと思えた。情報は集約され、整理されている方が格段に見やすい。そう思い、震災の二日後、自分のホームページに付け加えるかたちで震災関連情報のサイトを開設することにした。初めは同じページ内に、安否情報の確認リンクをまとめ、地震情報や、緊急時の支援にむけた注意点などを並べる形にした。計画停電が始まると、アクセス殺到で見にくい東京電力のサイトの掲載情報を、引用して別途公開するなどしてみた。各国語に翻訳された情報も、説明をすべて英語で書いたページを開き、各国語の言語名をクリックすれば翻訳のページを直接見られる形に工夫してみた。サイトの構築と更新については、Facebook と Twitter で情報を流した。個人のサイトでできることには限界も感じていたが、多い日は一日 600 件以上のアクセスがあり、自分で驚いた。

そのうちに政府や報道機関等でも震災関連の特集ページが開設され、情報が増加し整理され始めたのを受けて、現在は自分のサイトの情報更新はお休みしている。だがこうしたいわば「バーチャル・ボランティア」の経験を通して今回痛感したのは、日本語が母国語以外の人々に対して、日本の状況を発信する情報チャンネルの重要性だ。どんなに貴重な情報があってもその共有の幅が広がらなければ効果は薄い。英語での放送やウェブサイト構築はそれぞれで進められているも

の、それ以外の多言語で普段から情報を発信し、いざとなったときすぐ参照してもらえるような体制の整備は今後ますます重要となるだろう。これらの言語を日頃使用する中東研究者にとっても、今回の震災は社会との関わり方を考えるひとつの機会を提供してくれたのではないだろうか。

(錦田愛子)

被災者に暖かいキャバークを～在日イラン人による炊き出し

私は現在、在日イラン人男性のパーシャーイーさんが理事長を勤める NPO「ミントの会」と協力して、イランの身体障害者の支援活動をおこなっています。パーシャーイーさんは、5 年程前に当時働いていた神奈川県内の工事現場で事故に遭い、脊髄を損傷して下半身不随になりました。「ミントの会」は、パーシャーイーさんがリハビリ中に知り合った看護師や理学療法士、同じ障害をもつ仲間、そして在日イラン人の友人たちを中心に活動している小さな NPO です。看護師でもあり、大学院時代にはイラン国内の医療・福祉 NGO の活動を調査していた私は、イラン・日本両国の専門家や当事者団体を紹介するなどして、「ミントの会」に協力してきました。

年度始めの 4 月 3 日の日曜日、「ミントの会」の総会が開かれました。しかし、会場には、いつも手伝ってくれている仲間の在日イラン人たちの姿が見えません。事情を聞くと、メンバーのうち 12 人が、前日から岩手県の釜石市に行ってしまう、今日は総会に来られないということでした。

3 月 11 日に起こった東日本大震災は、想像を絶する被害をもたらしました。「ミントの会」の在日イラン人の仲間たちに被災者はいませんでした。しかし、被災地の惨状が次々と明らかになり、報道されるのを見て、被災した日本人のために、自分たちも何かをしなければと思うようになったのだそうです。いつも、日本とイランの障害者のために、名前も出さず裏方仕事をボランティアで頑張ってくれている仲間たちです。居ても立ってもいられない気持ちになって岩手県に行ったというのも、彼ららしい行動だと思いました。

釜石市の状況は深刻です。沿岸部は壊滅的な被害を受け、市街地も広範囲にわたって冠水しました。これを書いている 4 月 17 日現在、死亡者数は 700 人を超え、避難された被災者の方々も 1 万人近くのにぼったと報告されています。彼らは、被害の大きい釜石市に支援活動に入っていた友人のイラン人から、詳しい情報を得ていました。そして、冷たいものしか食べられない避難所の方々に暖かい食事と新鮮な野菜や果物を届けたいと考え、周囲のイラン人や日本人の協力を得て準

備をしたのだそうです。

土曜日の夕方から月曜日の夜まで、現地2泊の短い滞在でした。釜石市までは車で片道約12時間。炊き出しに使う鍋やガスも持参し、ゴミは全て持ち帰ってきたというので、詳しく聞いてみると、かなり大規模の炊き出しだったことがわかりました。2,100人分のチェロウ・キャバーブに加え、駅前の広場でおこなった炊き出しに出てこられない被災者のために、120個ほどのキャバーブ弁当も配ったということでした。

12人が岩手に向かった「車」というのは、2台の3tトラックとワゴン車2台でした。トラックの1台は日本人の知り合いから借りたという冷凍車で、キャバーブ用鶏もも肉250kgとトマト、キュウリ、キャベツ、バナナ、みかん、オレンジに、イラン産のざくろジュースとさくらんぼジュースと水を積みこみました。もう1台のトラックで、キャバーブを焼くための回転式グリル3台、ガスボンベと発電機、炊飯器7台、大鍋、食器に弁当用パック、米、その他にティッシュペーパーやマスクも運んで行ったそうです。キャバーブの調理のため、レストランで料理人をしているイラン人も同行しました。

なぜ詳細を記したかという点、こうした大規模な炊き出しは、実はイランで時々目にしていた光景でもあったからです。イラン国内では慈善活動が盛んで、貧困者や孤児のために一般個人から数t単位で果物が寄付されたり、数千人分の食事が寄付されたりすることもあります。アーシューラーなど宗教的な儀礼が執り行われる日にも、大規模な炊き出しがおこなわれます。こうした炊き出しでは、量の多さだけでなく、品質のよいものを提供するという心遣いが高く評価されます。

日本での生活が長いとはいえ、彼らもイラン人です。大きな被害を出した被災地での炊き出しは、自分たちにできる最大限の規模でおこなうのが当然という発想だったのでしょう。資金集めも物資調達も、慣れたものでした。そして、「日本に借りがあるから、当たり前のことをしたかった」という彼らの行為は、釜石市の方々に好意をもって受け入れていただけたようです。暖かいチェロウ・キャバーブと生の果物という食事は、珍しさもあって大人気だったということでした。

今回のことを醒めた目で見れば、震災から3週間目の釜石市で、偶然イラン的な炊き出しが好意的に受容されただけのことかもしれません。また、今後の復興までの道りは険しく、単発的におこなう支援ばかりでは、通用しないかもしれません。しかし、釜石の皆さんから頂いた、たくさんの感謝の言葉は、彼らの心に深く響いたようです。これからも支援を続けるつもりだと話す彼らの決意は、決して表面的な言葉とは思えませんでした。

(細谷幸子)

佐藤次高さんを偲んで

4月11日、本学会の元会長、佐藤次高さんが逝かれた。享年68歳、佐藤さんのあまりにも早すぎる死に直面して、14・15両日にわたる葬儀を終えた今も、私の心の中では信じられない気持ちと言いやうのない喪失感とがまじりあっている。

佐藤さんは卓越した研究者であると同時に、なにごとにつけおおらかな方であった。それゆえに多くの学生や仲間を引きつけ、イスラーム地域研究のように大きな研究プロジェクトを組織、指導することができたにちがいない。佐藤さんというよき先輩に巡り会ったのは、30年以上も前のことになる。それまでの東洋史学の固く、晦渋な論文とは打って変わり、清新な文体で見通しのよい論文を書かれていた佐藤さんは、後学にはじつに頼もしい存在であった。故護雅夫先生の門下生の中では、いつもリーダーの役割を果たされていた。1978年11月、私がトルコに留学するとき、佐藤さんは史学会の大会当日であったにもかかわらず、「こっちの方が面白そうだ」と言って空港まで見送ってくださったことを今でもよく覚えている。

佐藤さんとは東京大学文学部や財団法人東洋文庫、あるいは「イスラームの都市性」プロジェクトなどでご一緒する機会に恵まれた。もっとも苦楽をともにしたのは、科学研究費創成的基礎研究による「現代イスラーム世界の動態的研究」、すなわち最初のイスラーム地域研究プロジェクト(1997-2002年)のときである。佐藤さんは研究リーダーを務められ、私は事務局長として5年間肩を並べてプロジェクトの運営にあたった。人文系では前代未聞の壮大なプロジェクトであったが、佐藤さんはたじろぐ気配もみせず、最初に明確な目標を設定すると、それをほとんど実現するという見事な采配をふるわれた。嵐のようなプロジェクトが終わると、日本語によるイスラーム地域研究叢書全8巻と数においてはこれに勝る英語の論文集が刊行され、国内と海外とを結ぶ密接な研究ネットワークが出来上がり、多くの若手研究者がこれまた内外に育っていた。そして、これらの成果や実績によって、最初はいささか議論のあった「イスラーム地域研究」という佐藤さんの命名にかかるタームも、一葉の文書の解説から現代研究までを広く包摂するタームとして定着するに至った。

この間、佐藤さんは大局を見据えて細かなことは一切口に出さず、一方で率先して叢書や論文集の編集にあたられた。つねに陣頭に立ってリーダーシップを発揮されたのである。プロジェクト最後の国際会議を開催するときも、みずからいくつかの開催候補地をめぐって決定を下された。ちなみに2001年10月、千葉県木更津市のかずさアークでそれが開催されたとき、私たちはターリバーン政権下のアフガニスタンに対する空爆の開始を知ることになった。

佐藤さんの類い希なリーダーシップは、2007年に始った「NIHU(人間文化研究機構)プログラム イスラーム地域研究」でも遺憾なく発揮された。今度は早稲田大学の中心拠点で指揮をされる佐藤さんに、私は東京大学拠点の代表として接することになった。この5年間を通して佐藤さんの信念には揺るぎがなかったように思われる。たとえば、イスラーム地域研究の成果を英語の論文集のみならず、英語のモノグラフで刊行することを企画され、このシリーズをオランダの Brill 社から刊行することで話をまとめられた。これに手を挙げるメンバーがなかなか現れないなか、佐藤さんは多岐にわたる激務、さらに後にはガンとの闘病という厳しい状況にもかかわらず、みずから黙って範を示されようとしたにちがいない。奇しくも、同じく5年間のイスラーム地域研究第一期の最終期は、アラブ諸国で革命的な状況が連鎖する一大変革期と重なることになった。イスラーム地域研究の真価が問われるときでもある。

おそらく「イスラームの都市性」プロジェクト以来、あるいは日本中東学会の理事・会長として佐藤さんが熱心に取り組まれた課題の一つは、中東イスラーム研究における国際交流の強化と発展ではないだろうか。みずから中東の現地はもとより、北米中東学会大会などに出向かれたように、佐藤さんはこの面でも率先して活動されてきた。『日本中東学会年報』の編集委員会に Dale F. Eickelman 教授、Abdul-Karim Rafeq 教授、Stephen Humphreys 教授らをお迎えすることができたのも、佐藤さんが長年培ってこられた交友の賜にほかならない。これら旧友の皆様からは、三浦徹会員を介して心のこもった弔文をいただいた。このうち、Rafeq 教授の弔文には、要約すると次のように記されている。

私のかけがいのない友人、我が家のよき友の佐藤次高教授が、研究の頂点を迎えられたまさにそのときに、かくも突然に世を去られたことに深い衝撃を受け、この上ない悲しみを覚えております。彼を知り、彼と仕事をともにした者はみな、悲しみに打たれていることでしょう。昨年8月、佐藤夫妻はダマスカスの我が家を訪問され、娘に結婚祝いの日本の器を贈ってくださいました。その晩は至福の時を過ごしたことでした。佐藤教授が中東の歴史、イスラーム地域研究に果たされた大きな貢献、佐藤教授が構築されたアラブ世界との学術交流の強い絆、これは決して忘れられることはありません。ご冥福を祈ります。

私ごとを記すのをお許しいただけるならば、私は近く佐藤さんに訃書をお送りするつもりであった。それは中央アジア史ならびにイスラーム史研究で名高いロシアの東洋学者 V.V.バルトリドが今から 80 年ほど前に著わした古典的な著作『ト

ルキスタン文化史』である。いつも著書をいただくばかりで、たまにはお返しをしたかったということもあるが、もっと大きな理由は、その第2章にバルフ出身の聖者イブラーヒームに関する記述が見えるからである。自著（『聖者イブラーヒーム伝説』角川書店、2001年）にもまとめられた聖者イブラーヒームの話を読んだとき、佐藤さんはいつもとりわけ楽しそうにされていた。交通至便とは言い難い横浜の自宅からの通勤のさい、佐藤さんはいつも本を手にして読書を楽しんでいたという。その手にお届けすることができなかったのは、ほんとうに残念でならない。

佐藤さんの訃報に接したとき、私はなぜか、かつて佐藤さんが学士院賞恩賜賞を受賞されたとき、また東京大学を退官されたとき、われわれ知友・門下生が根津の居酒屋に集まって盛大な祝いの会を開いたことを思い出した。もはや佐藤さんと楽しい酒席を囲むことができないのも残念でならない。しかし、佐藤さんは凜として逝かれた。今はこの事実を受入れ、ご冥福をお祈りしたい。

(2011年4月19日記)

(小松久男)

会員異動

所属先・連絡先の訂正・変更については、本号と同時に発行する2011～2012年度会員名簿をご確認下さい。なお、原則として、本年2月より開始した会員データ照会調査の締め切り期日までにお知らせいただいた情報が、名簿には反映されておりますので、ご了承下さい。

【新入会員】

萩原 淳

蓼沼 理絵子

Kangsuk Kim

【2010年度末をもつての退会者】

上野 広文 大磯 正美 唐鎌 圭彦 岸 真由美 木村 将史 倉内 美智子
小橋川 唯之 小林 武史 小林 正樹 島 敏夫 島崎 浩 鈴木 瑛子
宗野 ふもと 高尾 具成 寺阪 昭信 内藤 陽介 中橋 恵 西川 皓太郎
野口 勝明 畑中 美樹 藤井 章吾 松原 正毅 宮本 邦昭 森竹 弘喜
矢作 朋宏 Samy Mohamad Soliman Ahmad

【物故者】

富塚 俊夫 四天王寺国際仏教大学教授

寄贈図書

【単行本】

鈴木均 『現代イランの農村都市』勁草書房、2011年
水谷周 『イスラーム現代思想の継承と発展—エジプトの自由主義』国書刊行会、
2011年
五十嵐大介 『中世イスラーム国家の財政と寄進—後期マムルーク朝の研究』刀水書
房、2011年
塩田勝彦、大阪大学世界言語研究センター監修 『ハウサ語基礎文法』、2010年
小林春夫、阿久津正幸、仁子寿晴、野元晋編 『イスラームにおける知の構造と変
容—思想史・科学史・社会史の視点から』早稲田大学イスラーム地域研究機構、
2011年
田中英式、宮原暁、山本博之共編 『ASEAN・中国 19 億人史上の誕生とその衝撃
—知己研究コンソーシアム共同企画研究シンポジウム報告書』地域コンソーシ
アム。京都大学地域研究総合情報センター、愛知大学国際中国学研究センター、
2011年
Gurdev S. Khush、*Role of Green Revolution for World Rice Production and
Future Prospects* （国際地域研究所創設 25 周年記念特別講演会）、日本大学
生物資源科学国際地域研究所、2011年

【論文】

鹿島正裕 「中東諸国の政治体制—類型論的考察に向けて」『金沢法学』第 53 巻第
2 号、金沢大学、2011年

【逐次刊行物】

- 『季刊アラブ』 No.136 日本アラブ協会、2011年
- 『地域研究』第11巻1号、2号、京都大学地域研究総合情報センター、2011年
- 『南・東南アジア諸国における都市近郊農業の現況と展開方向—国際地域研究所業書第25号、日本大学生物資源科学部国際地域研究所、2011年
- 『日本クウエート協会報—日本-クウエート国交樹立50周年記念号』 No.225、日本クウエート協会、2011年
- 『パキスタンのムシャツラフ(軍事)政権の諸政策—民族紛争の背景に関する地政学的研究 vol.14』 大阪大学世界言語研究センター、2010年
- 『The Arabic Language and the Palestinian Folklore in Daily Life—民族紛争の背景に関する地政学的研究 vol.15』 大阪大学世界言語研究センター、2010年
- 『考古学が語る古代オリエンター第18回西アジア発掘調査報告会報告集』 日本西アジア考古学会、2011年
- 『西アジア文明史における技術革新史像の構築—日本西アジア考古学会公開シンポジウム』 日本西アジア考古学会、2011年
- 『特集：上智カンボジア研究—上智アジア学』 第28号、上智大学アジア文化研究所、2010年
- 『NEWSLETTER No.6—京都大学 Global COD Program 生存基盤持続型の発展をめざす地域研究拠点』 京都大学東南アジア研究所、2011年

学会事務局の交替について

2011年度より、学会事務局は、慶應義塾大学に移転して、新井和広事務局長（理事）のもと運営されます。なお、2011年5月21～22日の第27回年次大会・総会までは、旧事務局が会務を行いますので、ご注意下さい。

【新事務局連絡先】

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学商学部 新井和広研究室内 日本中東学会事務局

電話番号：(045) 566-1247

(ファックスも同じ番号の予定ですが、ファックス購入時期は未定です)

メールアドレス：james@db3.so-net.ne.jp （現在と同じアドレスです）

(店田廣文)

事務局より

臼杵陽新会長、新井和広新事務局長のもと、14期理事体制による学会運営がスタートしました。さらなる学会の発展を期待しております。

13期事務局の2年間のうち、後半は私自身の健康問題もあり、事務局メンバーの方々をはじめ、長沢会長、前事務局長の赤堀理事に、事務局運営に関して大きなご迷惑をかけてしまいました。なんとか2年間を乗り切らせていただきました。とはいえ、任期最終盤の東日本大震災による混乱もあり、最後の最後まで、事務局の皆様には、ご苦勞のかけ通しでした。

事務局の仕事には、多くの方々に関わっていただきました。従事された期間はさまざまですが、皆様のご協力に感謝します。事務局長補佐の貫井万里さん、深見奈緒子さん、錦田愛子さん、アルバイトの飯野りささん、岡井宏文さん、北爪秀紀さん、沼田彩誉子さん、安川悦子さん、本当に有り難うございました。また、ニューズレター発送作業などに参加してサポートしてくれた店田ゼミの大学院生の皆さんにも感謝します。
(店田廣文)

編集後記

前回のニューズレター発行後、あまりにもインパクトのある人の生きざまや死にざま、興奮と暴力、想像を絶する自然の猛威と破壊のイメージがあらゆるメディアに氾濫し、茫然となることしばし、でありました。中東でも日本でも、当面している問題に丹念に一つ一つ取り組むしかないのでしょうか、先行き不透明感に足を引っ張られる感覚が否めません。

ところで…今年度もニューズレター担当になりました。ニューズレターをウェブ・マガジンとして発行することを検討してゆきたいと思っています。どうかよろしく願い申し上げます。
(山岸智子)



会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2012年度会費の郵便振替用紙、あるいは、それ以前の会費に未納がある方には、該当する年度も明記した郵便振替用紙、が同封されておりますのでご利用ください。AJAMESに未送付分がある場合は、**2011年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。**会費納入率は低い状態が続いており、学会事務局の運営にも支障を来しかねない状況です。是非とも会費納入を宜しくお願い申し上げます。請求会費額は2011年3月末日の入金確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

日本中東学会ニューズレター 第124号

発行日 2011年5月13日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒162-0041
東京都新宿区早稲田鶴巻町 513 番地
早稲田大学 120-4 号館 3 階
早稲田大学イスラーム地域研究機構気付
日本中東学会事務局
電話/ファクス：03-5286-1966
Eメール: james@db3.so-net.ne.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>
郵便振替口座：00140-0-161096(日本中東学会)
銀行口座：三井住友銀行渋谷支店(普)5346808
(日本中東学会 代表 長沢 栄治)